

幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究

—親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連—

(中間報告)

筑波大学大学院

三 鈺 泰 代

本研究では、①幼児期の子どもをもつ親の養育スキルを測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性を検討すること、②親評定と保育者評定によって子どもの行動傾向を測定し、親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連を明らかにすることを目的とする。本中間報告においては、まず、養育スキル尺度の作成および信頼性・妥当性の検討、父親と母親の養育スキルの差の検討について報告を行った。因子分析の結果、9 因子 45 項目からなる養育スキル尺度が作成され、一定の信頼性・妥当性を有した尺度であることが示された。さらに、父親と母親で使用するスキルに差があることが明らかとなった。今後は、子どもの行動傾向と親の養育スキルとの関連について分析するとともに、親子のコミュニケーションの行動観察によって養育スキル尺度の妥当性の検討を行う予定である。

【キー・ワード】 養育スキル, 幼児, 子どもの行動傾向

はじめに

近年、日本社会は少子化が急速に進み、2007 年に厚生労働省が発表した人口動態統計によれば、平成 17 年度の合計特殊出生率は 1.26 まで低下したことが報告された。平成 18 年度には 1.32 に回復したものの（厚生労働省、2007a）、この変化は一時的な回復との見方もあり、少子化対策や子育て支援の充実が社会的にも早急な課題となっている。少子化が深刻化する一方で、虐待問題への取り組みも急務となっている。児童相談所の虐待相談件数は年々増加傾向を示しており、平成 18 年度に全国の児童相談所に対応した児童虐待相談対応件数（速報値）は 37343 件にも昇ると報告されている（厚生労働省、2007b）。加えて、虐待に至らないまでも仕事と家庭の両立の悩みや子育てに不安を抱える親は多い。未就学児の父母 2000 名を対象とした調査（厚生労働省、2003）では、子育ての不安や悩みとして、「子どもとの接し方に自信がもてない」に母親 43.6%、父親 24.3%が、“そう思う”または“ややそう思う”と回答している。平成 16 年度の全国家庭児童調査（厚生労働省、2006）においても同様に、子育てについての不安や悩みの状況として、「子どものしつけに関すること」に母親 54.2%、父親 50.3%、「子どもの育て方について、自信がもてないこと」に母親 22.5%、父親 20.2%が“悩みがある”と回答している。このように、母親・父親ともに子育てに悩みや不安を抱えていることが示され、子育てしやすい社会的な制度や子育て支援の整備が未だ不十分である現状がうかがえる。

問題と目的

子どもの問題行動とペアレント・トレーニング

子育てに関する悩みを持つ母親の支援という立場から、近年、日本においてもペアレント・トレーニング (Parent Training ; 以下 PT と略す) の実践が注目されるようになってきた。PT とは「親に自分の子どもに適応行動を獲得させたり問題行動を減少させたりすることができるように、行動療法の講義や実習を系統的に行う行動療法の一領域 (大隈・免田・伊藤, 2002)」と定義され、親は子どもの行動を理解し、子どもがよい行動を学習し実行するのを助けるために必要な養育スキルを学ぶ。日本では AD/HD 児の親への支援を中心に PT が実践され、その効果が報告されてきている (例: 大隈ら, 2002 ; 藤井, 2003 ; 上林, 2003)。これらのプログラムは一般の母親を対象にはまだ積極的に導入されていないが、子育ての仕方がわからない親や子育てに自信の持てない親が増加しているといわれる今、PT を行うことによって、有効な子育て支援を行うことができると考えられる。

親の養育スキルに関する研究の必要性和本研究の目的

PT では、親の不適切な養育行動の変容と家族内の対人環境の修正によって子どもの問題行動を低減するという試みがなされている。したがって、PT が効果的に行われるためには、親のどのような行動が子どもの問題行動の低減や好ましい行動の増加にとって有効であるかを明らかにする必要がある。その際に、「養育スキル (Parenting skills)」に関する研究の知見が参考になる。近年では、母親が子どもに働きかける行動に注目した「養育スキル」に関する研究がわが国でも行われるようになってきた。佐藤・佐藤・岡安・立元 (2001) は、「罰」、「一貫性のないしつけ」、「援助的な言葉かけ」、「関心」、「コミュニケーション」、「制限」の6因子27項目からなる養育スキル尺度を作成し、母親の養育スキルが子どもの社会的スキルや母親の心理的ストレスに関連していることを明らかにしている。さらに、三鈷・濱口 (2006) は母親の養育スキルを測定する尺度を作成し、母親の育児不安と養育スキルが子どもの問題行動に与える影響について検討した。しかし、十分な信頼性が得られなかった下位尺度があることなどから、幼児期の親の養育スキルを測定するために、信頼性と妥当性を兼ね備えた、より包括的な尺度が作成される必要があると考えられる。さらに、これまでの研究においては母親の養育スキルを扱った研究が多く、父親の養育スキルが子どもに与える影響はほとんど検討されていない点も課題といえる。加えて、親評定と保育者評定という2つの視点から子どもの行動傾向を測定し親の養育スキルとの関連を検討すること、親の自己報告式の尺度で測定した養育スキルが実際の親子のコミュニケーションを反映したものとなっているか親子の行動観察によって妥当性を検証することが必要であると考えられる。

以上より、本研究では、①幼児期の子どもをもつ親の養育スキルを測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性を検討すること、②親評定と保育者評定によって子どもの行動傾向を測定し、親の養育スキルとの関連を明らかにすることを目的とする。子どもの行動傾向としては、向社会的行動と問題行動をとりあげ、養育スキルとの関連を検討する。なお、本中間報告においては、研究経過の一部として養育スキル尺度の因子構造および信頼性・妥当性の検討、父親と母親の養育スキルの差の検討について報告する。

方 法

調査対象者：茨城県の保育所・幼稚園に通う2～6歳児の母親・父親1087組および母親44名（調査1：父母484組，調査2：父母603組および母親44名）を対象とした質問紙調査を実施した。さらに，調査2の子どものクラス担任28名に対して，子どもの園での様子について尋ねる質問紙調査を実施した。

調査時期：2007年6月～9月。

手続き：茨城県内の公立保育所8所，公立幼稚園7園（調査1：保育所3所・幼稚園3園，調査2：保育所5所・幼稚園4園）に協力を依頼し，質問紙2部（父親用と母親用，同一のもの）と保護者あての依頼書を入れた封筒を各施設において一斉に配布した。質問紙と同封した依頼書において，おおまかな調査の目的や趣旨，プライバシーが守られること，協力が任意であることなどを説明し，回答した質問紙を入れた封筒は封をした状態で提出するよう求めた。質問紙への回答および用紙の提出をもって，調査協力への同意を確認した。質問紙の配布から回収までの期間は2～3週間程度とした。各施設の要望に応じて，各クラス内に回収用の袋を設置する方法，または子どもの送迎の際に職員に提出する方法で質問紙を回収した。調査2では，保護者からの質問紙を回収後，担任保育者を対象に園における子どもの行動傾向を尋ねる質問紙調査を実施し，クラスの規模にあわせて各クラス10名程度の子どものついて評価を依頼した。

調査内容：

【調査1の質問紙の構成】

- ① 調査対象者および家族について尋ねる項目：回答者の年齢，性別，職業，家族形態，子どもの人数，調査用紙を持ち帰ってきた子どもの年齢・性別および出生順位について尋ねた。子どもが二人以上いる場合は，ここで特定した子どもに対する子育ての様子や意識を答えるよう教示した。
- ② 育児不安を測定する尺度：牧野（1982）の育児不安尺度14項目（4件法）。
- ③ 養育スキルを測定する項目：三鈿・濱口（2006）の養育スキル尺度（24項目）に加えて，Stormshak，Bierman，McMahon & Lengue（2000）を参考に不適切な養育行動に関する項目を，Hoffman（2000）を参考に，「誘導的しつけ」に関する項目を作成し，計54項目の養育スキル尺度項目を独自に作成した。そして，作成した各項目が養育スキルを測定する項目として妥当であるか，心理学を専攻する大学院生2名と教員1名で検討し，内容的妥当性を確認した。各項目に対して，そのような行動がどのくらいあるか“全くそうではない（1）”～“いつもそうである（4）”の4段階で評価を求めた。
- ④ 養育態度を測定する項目：作成した養育スキル尺度の構成概念妥当性を検討するために，戸田（2000）の養育態度尺度より，権威的養育態度の「暖かさ／関係」，「言語的勇気づけ」の計11項目を使用した（5件法）。加えて，TK式親子関係検査（品川・品川，1992）より「非難」，「矛盾」の計16項目を使用した（4件法）。

【調査2の質問紙の構成】

- ①～③ 調査1と同一。

- ④ 子どもの向社会的行動を測定する項目：森下・庵田（2005）の家庭での子どもの行動尺度の中から、向社会性尺度11項目（4件法）。
- ⑤ 子どもの問題行動を測定する項目：フェイスシートにおいて特定した子どもの年齢が2歳から3歳の場合は、CBCL/2-3（中田・上林・福井・藤井・北・岡田・森岡，1999）の中から、「反抗尺度」、「分離不安尺度」の計23項目に回答を求めた（3件法）。一方、子どもの年齢が4歳から6歳の場合は、CBCL/4-18（井潤・上林・中田・北・藤井・倉本・根岸・手塚・岡田・名取，2001）の中から、「攻撃的行動尺度」、「ひきこもり尺度」の計29項目に回答を求めた（3件法）。

【担任保育者への質問紙の構成】

各クラス10名程度の子どもについて、以下の項目それぞれに回答を求めた。

- ① 子どもについて尋ねる項目：対象となる子どもの年齢および性別を尋ねた。
- ② 子どもの向社会的行動を測定する項目：森下・庵田（2005）の園での子どもの行動尺度の「向社会性尺度」7項目のうち、「友達を励ましたり応援したりする」、「友達が悲しんでいたるとき、なぐさめる」、「友達が困っていたら助ける」の3項目を使用した（4件法）。
- ③ 子どもの問題行動を測定する項目：対象となる子どもの年齢が2歳から3歳の場合は、CBCL/2-3（中田ら，1999）の中から、反抗尺度より「かんしゃくをおこす」、「怒りっぽい」、「よくすねる」の3項目、分離不安尺度より「はずかしがりや、臆病である」、「人目を気にする、はずかしがる」、「大人にまとりつく」の3項目に回答を求めた。一方、子どもの年齢が4歳から6歳の場合は、CBCL/4-18（井潤ら，2001）の中から、攻撃的行動尺度より「よく言い争いをする」、「よくつかみあいのケンカをする」、「かんしゃく持ち」の3項目、ひきこもり尺度より「他人といるより一人でいるのを好む」、「内気、臆病」、「引きこもって他人と関わりを持たずとしない」の3項目に回答を求めた（3件法）。

結果と考察

1. 養育スキル尺度の因子構造の検討

調査1・調査2あわせて782名（母親519名，父親263名）の回答を回収した。回収率は母親45.9%，父親24.2%であった。養育スキル尺度の尺度構成については、調査1と調査2をあわせたデータを用いて分析を行った。

養育スキル尺度54項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行ったところ、固有値1を基準として10因子を抽出したが、一部の因子が解釈不可能であったため、因子数を7～9因子と指定した上で再度因子分析を行った。そして、解釈可能性の観点から9因子構造を採用した。さらに、因子負荷量が.40に満たない9項目を除いた45項目で再度同じ方法で因子分析をし、9因子を抽出した。累積寄与率は50.20%であった。回転後の因子パターン行列を表1に示した。なお、父親・母親をわけて因子分析を行った際にもほぼ同様の因子構造が抽出されたため、父親と母親を併せて分析を行った。

表1 養育スキル尺度(45項目)の因子パターン行列(プロマックス回転後)と項目平均・標準偏差

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	平均(SD)
F1: 誘導的しつけ(α=.90)										
51. 子どもが他者に悪いことをしたとき、その行動のせいで相手がイヤな気持ちになったことを子どもに伝える	.96	-.07	.02	.00	-.02	-.13	.03	.00	.01	3.38 (.62)
54. 子どもが他者をイヤな気持ちにさせる行動をとったときに、相手の気持ちを考えるように子どもを促す	.86	.00	.04	-.03	.04	-.09	.05	.04	.02	3.35 (.66)
42. 子どもが他者にいじわるをしたとき、どれだけ相手が傷ついたか子どもに考えさせる	.83	-.04	-.01	.01	.07	-.05	-.08	-.03	-.01	3.42 (.63)
34. 子どもが他者と何かトラブルを起こしたとき、自分が相手の立場だったらどう思うか子どもに考えさせる	.81	-.06	.01	.04	-.01	-.01	-.06	-.03	.01	3.34 (.63)
2. 子どもが他者に何か不適切な行動をしたときに、相手がどんな気持ちになるか子どもに考えさせる	.59	.02	.01	.01	.00	.16	-.04	.01	.00	3.44 (.60)
24. 子どもが他者に危害を加えそうになったとき、その行動の結果、相手がどんな目にあうか言葉で伝える	.56	.06	-.04	.00	-.05	.22	.03	.02	-.02	3.42 (.65)
F2: 感情的叱責(α=.82)										
45. 感情にまかせて子どもをしかる	-.01	.85	.04	-.05	-.04	-.02	-.10	-.08	.04	2.17 (.80)
37. 子どもが悪いことをしたとき、自分の気分によって叱る程度が変わる	-.02	.64	.03	-.12	.01	-.06	.04	.04	.05	2.23 (.83)
13. 子どもが悪いことをすると、感情的に怒って言葉で責める	.03	.59	-.04	.27	.01	-.01	-.06	-.04	-.11	2.72 (.68)
43. 子どもが何か失敗すると、きつくせめる	-.02	.59	-.04	-.03	.03	.07	.01	.02	.02	1.98 (.72)
47. 子どもが言うことをきかないと、大声でどなりつける	.08	.54	-.02	.28	.01	-.05	-.07	.02	-.09	2.60 (.81)
31. 子どもを罰するときには、おしをつかう	-.12	.51	-.01	-.07	.08	.11	-.04	.07	.19	2.03 (.82)
44. 「良い子にしていなさい」のように、あいまいな指示をついてしまう	-.03	.50	.02	-.01	.05	.00	.15	-.03	-.11	2.32 (.78)
33. 自分のきげんが悪いから、子どもが良いことをしてもほめない	.03	.45	.00	-.11	.02	-.25	.06	-.01	.16	1.75 (.74)
F3: 注目・関与(α=.83)										
35. どんなに忙しくても、子どもと話したり一緒に遊んだりする	-.06	-.07	.76	.00	.06	-.10	-.22	-.10	.12	2.91 (.73)
5. 忙しくても、子どもの行動をしっかり見るようにしている	.02	.05	.73	-.04	.05	.10	.11	.07	-.03	2.91 (.71)
50. どんなに疲れていても、子どもと一緒に運動したりゲームをしたりする	-.06	-.15	.66	.00	.15	-.11	-.16	-.06	.09	2.61 (.70)
53. 何か家事をしていても、子どもの様子や状況をできるだけ把握するようにしている	.16	.13	.59	.03	-.09	.07	.07	-.02	-.03	3.17 (.70)
1. 子どもが何をしているかよく見るようにしている	.12	.04	.58	.05	-.14	.10	.20	.03	-.03	3.20 (.63)
10. 子どものやっていることを注意深く見守っている	-.03	.00	.56	.07	-.06	.22	.09	.07	-.05	3.03 (.67)
F4: スパニング(α=.83)										
19. 子どもが言うことをきかないと、子どもの手や足をびしゃりとたたく	-.01	-.03	.03	.94	-.01	.03	.02	-.04	-.02	2.46 (.84)
4. 子どもが悪いことをすると、子どもの手や足をびしゃりとたたく	-.02	-.08	.01	.91	-.02	.03	-.03	.01	-.04	2.63 (.85)
21. 子どもがどうしてもいうことをきかない時には、つい子どもの顔や頭をたたく	.04	.08	-.10	.57	-.02	.00	.01	-.01	.21	2.14 (.91)
28. 子どもが触ってはいけない物を触ろうとした時、子どもの手や足をびしゃりとたたく	-.05	.03	.17	.45	.19	-.15	-.04	.14	.03	2.09 (.88)
F5: 物的報酬(α=.85)										
40. 子どもが良いことをしたら、ごほうびをあげる	.01	.02	-.02	.01	.85	-.05	.03	-.01	-.05	2.58 (.77)
38. 子どもが嫌なことでもがんばっていたら、ごほうびを与える	.03	.08	.02	-.05	.85	.04	-.05	-.02	-.02	2.74 (.78)
16. 子どもが苦手なことに挑戦していたら、がんばったごほうびを与える	.00	.02	.00	.04	.75	.14	-.05	.01	-.07	2.88 (.73)
48. 子どもが良いことをしたら、好きなものを買ってあげる	.01	-.05	-.09	.08	.59	.02	.28	.05	.06	2.04 (.80)
F6: 援助的コミュニケーション(α=.82)										
14. 何が良かったのか子どもに伝えながらほめる	.00	-.09	-.01	.03	-.03	.66	-.02	.03	.07	3.16 (.64)
15. 子どもが困っているときには、良い解決策と一緒に探す	.04	-.03	.04	.01	.05	.61	-.03	-.02	.00	3.09 (.65)
6. 子どもが困っているとき、言葉で励ます	.00	.11	.06	.03	.01	.60	.06	-.04	-.10	3.28 (.60)
7. 子どもの行動を禁止する際には、その行動が他者に与える迷惑を子どもに分かる言葉で伝える	.32	.11	.00	-.15	.03	.48	-.07	.02	.03	3.35 (.66)
9. どんなに時間がなくても、子どもが良いことをしたらほめる	-.07	-.07	.22	.03	.05	.48	-.01	-.01	-.03	3.42 (.60)
8. 子どもが悪いことをしたとき、理由を聞くようにしている	.23	-.02	-.04	-.08	.07	.46	-.04	-.04	.09	3.27 (.73)
17. すべきことを、わかりやすく子どもに伝える	.05	-.07	.15	-.05	.08	.41	-.04	.01	.08	3.05 (.64)
F7: きげんとり(α=.62)										
39. 買い物をしているときに子どもが泣きさげぶと、つい好きなものを買ってあげる	-.01	-.08	-.01	.05	.11	-.01	.62	-.12	.09	1.86 (.79)
41. 子どもの悪い行動に対して罰を与えると決めても、子どもが嫌がるとやめる	-.01	-.04	-.06	-.03	.00	.11	.51	-.05	.04	2.03 (.73)
32. 子どもがかんしゃくをおこすと、すぐにきげんをとろうとする	-.04	.08	.12	-.08	.08	-.14	.49	-.03	.05	1.64 (.67)
18. 子どもに何かさせようとしても、子どもが嫌がると途中であきらめる	-.04	.03	.02	.00	-.03	-.05	.43	.08	-.07	2.59 (.68)
F8: 不適切行動の無視(α=.68)										
22. 子どもが泣きさげんで自分の要求を通そうとしても、相手にしない	-.02	-.06	-.02	.03	.00	-.01	.00	.74	.01	2.73 (.73)
3. 子どもがわがままを通そうとしてぐずっても取り合わない	.00	.04	.03	-.02	.01	.06	-.12	.64	-.01	2.89 (.73)
12. 子どもが注意を引こうとしてめめそ泣いても取り合わない	.04	.03	-.05	.02	.01	-.10	.03	.51	.08	2.54 (.71)
F9: 身体的攻撃(α=.76)										
49. 感情的になると、つい子どもを押ししたり、突き飛ばしたりする	.04	.10	.01	.04	-.01	.05	.01	-.03	.71	1.48 (.70)
36. 怒った時に、つい子どもに物をなげつける	.00	.05	.09	-.04	-.06	-.04	.06	.07	.64	1.31 (.58)
30. 怒りにまかせて、つい子どもをぶったり蹴ったりする	-.01	.13	-.07	.26	-.08	.09	.00	-.02	.54	1.67 (.79)
因子抽出法: 主因子法										
因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	
F2	-.02	—								
F3	.40	-.37	—							
F4	.02	.48	-.09	—						
F5	.06	-.01	.13	.09	—					
F6	.57	-.34	.59	-.19	.16	—				
F7	-.24	.22	.01	-.04	.28	-.13	—			
F8	.06	.33	-.11	.30	-.11	-.11	-.18	—		
F9	-.09	.56	-.22	.52	.06	-.28	.09	.17	—	

第 1 因子は、子どもの不適切な行動がいかに相手を傷つけているかを相手の視点に立って考えさせる「誘導的しつけ」に相当する項目からなる因子と判断されたため、「誘導的しつけ」因子と命名した。第 2 因子は、子どもに対する罰として感情的に叱責する行動と解釈されたため、「感情的叱責」因子と命名した。第 3 因子は、子どもの様子や行動に注目したり、遊びや活動を一緒に行ったりするスキルと解釈し、「注目・関与」因子と命名した。第 4 因子は、子どもの不適切な行動に対して手足を叩いて注意する行動と判断されたため、「スパンキング」因子と命名した。第 5 因子は、子どもの良い行動に対して物的報酬を与えてほめるスキルと解釈されたため、「物的報酬」因子と命名した。第 6 因子は、賞賛や励ましといった子どもに対するポジティブな働きかけや、援助的な関わりのスキルと解釈されたため、「援助的コミュニケーション」因子と命名した。第 7 因子は、子どもの不適切な行動に対して子どもの機嫌をとろうと一貫性のない行動を示す項目と解釈され、「きげんとり」因子と命名した。第 8 因子は、子どもが自分の要求を通そうとしたり注意をひこうとしたりして不適切な行動をしたときに、取り合わないで我慢するスキルと解釈されたため、「不適切行動の無視」因子と命名した。第 9 因子は、子どもに対して怒り感情を伴った身体的攻撃を示す因子と判断されたため、「身体的攻撃」因子と命名した。

因子分析の結果に基づいて、各因子に負荷量の高い項目の得点をそれぞれ単純加算し、下位尺度得点を算出した。各尺度得点の得点範囲、父母別および全体の平均値と標準偏差を表 2 に示した。

表 2 養育スキル下位尺度得点の平均値と標準偏差および父母の平均値の差

	得点の分布			全体		父親			母親			父母の差
	範囲	最小値	最大値	N	平均 (SD)	N	平均 (SD)	N	平均 (SD)			
F1: 誘導的しつけ	6~24	6	24	763	20.35 (3.13)	252	19.05 (3.30)	510	20.99 (2.83)	父<母**		
F2: 感情的叱責	8~32	8	31	763	17.80 (4.14)	254	16.98 (4.09)	508	18.21 (4.12)	父<母**		
F3: 注目・関与	6~24	7	24	766	17.81 (3.04)	254	17.28 (3.21)	511	18.08 (2.93)	父<母**		
F4: スパンキング	4~16	4	16	768	9.33 (2.83)	253	9.28 (3.09)	514	9.35 (2.70)			
F5: 物的報酬	4~16	4	16	764	10.25 (2.57)	253	10.74 (2.35)	510	10.02 (2.63)	父>母**		
F6: 援助的コミュニケーション	7~28	12	28	761	22.65 (3.14)	249	21.86 (3.37)	511	23.03 (2.95)	父<母**		
F7: きげんとり	4~16	4	15	751	8.12 (1.96)	252	8.17 (2.05)	498	8.10 (1.91)			
F8: 不適切行動の無視	3~12	3	12	765	8.18 (1.69)	251	8.06 (1.64)	513	8.23 (1.72)			
F9: 身体的攻撃	3~12	3	12	765	4.46 (1.72)	253	4.29 (1.62)	511	4.55 (1.77)	父<母†		

注) ** $p < .01$, † $p < .10$ を表す。

2. 養育スキル尺度の信頼性・妥当性の検討

養育スキルの各下位尺度について、クロンバックの α 係数によって内的一貫性を検討したところ、表 1 に示す値が得られた。「きげんとり」と「不適切行動の無視」については α が .70 を下回る値であったが、使用に耐える範囲内の信頼性におさまっている。その他の下位尺度は .76~.90 の値をとり、一定の内的一貫性が確認された。

次に、調査 1 のデータ（父親 120 名，母親 220 名，計 340 名）を用いて、養育スキルの基準関連妥当性の検討を行うため、「非難」、「矛盾」、「暖かさ／関係」、「言語的勇気づけ」、「育児不安」の各尺度得点と養育スキル下位尺度得点との相関を父母別に算出した（表 3）。その結果、「誘導的しつけ」、「注目・関与」、「援助的コミュニケーション」は父母共に「暖かさ／関係」および「言語的勇気づけ」と中程度から高い正の相関が得られ、「非難」、「矛盾」とは弱い負の相関が示された。「感情的叱責」、

「スパンキング」、「身体的攻撃」は父母共に「非難」、「矛盾」と高い正の相関が得られ、特に母親においては「暖かさ／関係」および「言語的勇気づけ」とも弱い負の相関が示された。「感情的叱責」に関しては、「育児不安」とも中程度の正の相関を示し、怒りを抑えられず感情的に子どもを叱責してしまう親は、育児不安も高いことが明らかとなった。「不適切行動の無視」は、子どもの不適切な行動に対して取り合わずに毅然とした対応をするという意味で、「矛盾」と負の相関がみられると予想されたが、母親において「非難」、「矛盾」と弱い正の相関を、「暖かさ／関係」、「言語的勇気づけ」とは弱い負の相関が示された。「不適切行動の無視」は「感情的叱責」や「スパンキング」との因子間相関も正の値を示していることから、ネガティブな養育態度と関連するスキルであることが明らかとなった。また、「きげんとり」は父母ともに「矛盾」と有意な正の関連を示したことから、子どもに合わせて矛盾した一貫性のない対応をとる行動を測定していると言えるであろう。「物的報酬」に関しては、父母で異なる関連がみられた。母親の場合は「矛盾」とのみ弱い正の関連を示したのに対して、父親ではポジティブな養育態度である「暖かさ／関係」、「言語的勇気づけ」と有意な正の関連がみられた。したがって、物的報酬を用いる際に、父母でその機能や目的が異なる可能性が考えられる。

以上のように、本研究で作成された養育スキル尺度は、既存の養育態度を測定する尺度との関連からみても、父親・母親の養育スキルを測定する尺度としてある程度妥当なものであると言えるであろう。

表3 養育スキル尺度得点と育児不安および養育態度得点の相関

	暖かさ／関係	言語的勇気づけ	非難	矛盾	育児不安
父親					
F1: 誘導的しつけ	.59 **	.65 **	-.06	-.29 **	-.25 **
F2: 感情的叱責	-.32 **	-.29 **	.72 **	.70 **	.48 **
F3: 注目・関与	.54 **	.50 **	-.23 *	-.15	-.28 **
F4: スパンキング	-.19 *	-.08	.54 **	.50 **	.32 **
F5: 物的報酬	.26 **	.27 **	.03	.07	-.02
F6: 援助的コミュニケーション	.67 **	.71 **	-.22 *	-.34 **	-.37 **
F7: きげんとり	.16 †	.01	-.01	.29 **	.07
F8: 不適切行動の無視	-.18 †	-.07	.19 *	-.11	.12
F9: 身体的攻撃	-.14	-.07	.57 **	.53 **	.41 **
母親					
F1: 誘導的しつけ	.35 **	.49 **	-.16 *	-.24 **	-.10
F2: 感情的叱責	-.28 **	-.30 **	.74 **	.71 **	.41 **
F3: 注目・関与	.50 **	.50 **	-.30 **	-.33 **	-.21 **
F4: スパンキング	-.33 **	-.15 *	.56 **	.32 **	.13 †
F5: 物的報酬	.10	.08	.04	.18 *	.04
F6: 援助的コミュニケーション	.53 **	.56 **	-.32 **	-.35 **	-.28 **
F7: きげんとり	.04	-.05	.04	.29 **	.18 **
F8: 不適切行動の無視	-.30 **	-.18 **	.32 **	.24 **	.16 *
F9: 身体的攻撃	-.23 **	-.12 †	.62 **	.50 **	.23 **

注) † $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$ を表す。

3. 養育スキル下位尺度得点の父親・母親の差の検討

養育スキルの各下位尺度において、父親と母親で平均値の差があるか検討するため、 t 検定を行った。その結果、「誘導的しつけ」($t(760)=8.43$, $p<.01$), 「感情的叱責」($t(760)=83.88$, $p<.01$), 「注

目・関与」($t(763)=3.45, p<.01$), 「援助的コミュニケーション」($t(737.20)=4.68, p<.01$), 「身体的攻撃」($t(762)=1.95, p<.10$) は父親に比べて母親の方が得点が高い結果となり, 父親に比べて母親の方が相対的に多い頻度で行う行動であることが明らかとなった。日常の子育てにおいては父親に比べて母親の方が子どもと接する時間が長く, 結果的に母親は肯定的な関わりと否定的な関わりの両方が多くなると考えられる。一方, 「物的報酬」に関してのみ母親より父親の方が相対的に多く使用していることが示された ($t(761)=3.65, p<.01$)。母親の方が「援助的コミュニケーション」や「注目・関与」が多いことから, 母親は子どもに対して言語的な報酬や対人関係的な報酬を多く使用するのに対して, 父親は物的報酬を多く用いる傾向があると考えられる。このように, 子どもに報酬を与える際の方法に父母でちがいがある可能性が示唆された。「スパンキング」, 「きげんとり」, 「不適切行動の無視」については父母で有意な差はみられず, 父母に同程度みられる行動であることが示された。

まとめと今後の計画

本中間報告においては, 養育スキル尺度の因子構造および信頼性・妥当性の検討, 父親と母親の養育スキルの差について報告を行った。まず, 父親・母親の養育スキルを測定する尺度を作成し, その信頼性・妥当性を検討したところ, 「誘導的しつけ」, 「感情的叱責」, 「注目・関与」, 「スパンキング」, 「物的報酬」, 「援助的コミュニケーション」, 「きげんとり」, 「不適切行動の無視」, 「身体的攻撃」の9因子からなる養育スキル尺度が作成され, ある程度の信頼性・妥当性を有した尺度であることが示された。次に, 父親と母親の養育スキルの差を検討した結果, 父親に比べて母親の方が子どもに対して援助的・肯定的関わりと叱責・攻撃的行動がともに多いこと, 物的報酬のみ父親の方が母親より多いことが明らかとなった。

今後は, 親評定と保育者評定によって測定した子どもの行動傾向と親の養育スキルとの関連について分析を進める。幼児期の子どもをもつ父親・母親の養育スキルが子どもの行動傾向の形成にどのような影響を与えるのか, 分散分析, 共分散構造分析などを行って明らかにしていきたいと考えている。さらに, 養育スキル尺度の妥当性を検討するために親子のコミュニケーションの行動観察も実施する予定である。これらの研究を通して, 子育てに悩みや不安を抱える親への援助や子育て支援に対して有効な知見を得たいと考えている。

引用文献

- 藤井和子 2003 ペアレントトレーニング・プログラム-AD/HD を持つ子どもと親への理解と援助のために- 小児の精神と神経, **43**, 1, 18-22.
- Hoffman, M. L. 2000 Empathy and Moral Development. Implications for Caring and Justice. (菊地章夫・二宮克美 訳 2001 共感と道徳性の発達心理学 川島書店)
- 井潤知美・上林靖子・中田洋二郎・北道子・藤井浩子・倉本英彦・根岸敬矩・手塚光喜・岡田愛香・

- 名取宏美 2001 Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発 小児の精神と神経, **41**, 4, 243-252.
- 上林靖子 2003 わが国における AD/HD 臨床の現在 小児の精神と神経, **43**, 1, 5-14.
- 厚生労働省 2003 「子育て支援策等に関する調査研究」報告について
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1.html> 5月2日更新.
- 厚生労働省 2006 平成16年度全国家庭児童調査結果の概要
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0630-6.html> 6月30日更新.
- 厚生労働省 2007a 平成18年人口動態統計月報年計(概数)の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai06/index.html> 6月8日更新.
- 厚生労働省 2007b 平成18年度児童相談所における児童虐待相談対応件数(速報値)
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/07/h0710-3.html> 7月10日更新.
- 牧野カツ子 1982 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉 家庭教育研究所紀要, **3**, 34-56.
- 森下正康・庵田奈甫 2005 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **15**, 47-56.
- 中田洋二郎・上林靖子・福井知美・藤井浩子・北道子・岡田愛香・森岡由起子 幼児の行動チェックリスト(CBCL/2-3)の日本語版作成に関する研究 小児の精神と神経, **39**, 305-316.
- 大隈紘子・免田賢・伊藤啓介 2002 治療と指導—ペアレント・トレーニング 小児科診療, **6**, 955-959.
- 三鈷泰代・濱口佳和 2006 乳幼児をもつ母親の育児不安と養育スキルおよび子どもの問題行動との関連 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, p666.
- 佐藤正二・佐藤容子・岡安孝弘・立本真 2001 地域子育て支援センターにおける親子への対人行動訓練 養育スキル査定法の開発 平成12年度産学連携等研究 研究成果報告書.
- 品川不二郎・品川孝子 1992 TK式幼児用親子関係検査 田研出版.
- Stormshak, K., Bierman, K., McMahon, R. & Lengue, L. 2000 Parenting Practices and Child Disruptive Behavior Problems in Early Elementary School. *Journal of Clinical Child Psychology*, **29**, 1, 17-29.
- 戸田須恵子 2000 母親の育児ストレスと幼児の気質及び養育態度との関係について 北海道教育大学紀要(教育科学編), **50**, 2, 35-45.

謝 辞

本研究を実施するにあたり、筑波大学人間総合科学研究科 濱口佳和教授に多大なご指導を賜りました。心より感謝致します。また、調査の実施にご協力頂きました、幼稚園・保育所の先生方、保護者の皆様にも感謝致します。ありがとうございました。

